

# あじえんだ

第8号



## 《も く じ》

- テーマ随想「私の環境へのこだわり」 .....2
  - ・ 環境保全への思いと実践 渡辺一法
  - ・ 縄文人の環境問題 松川 義彦
  - ・ 積み重ねの成果を実感 小川昌三
  - ・ 明見湖の再生 堀内光代
- 特別記事〔小中学生の見た川〕 吉川哲郎／河西真央 .....5
- 流域シンポジウム・上下交流事業報告 .....6
- 流域ウォッチング⑥ 流域食べあるき 一産、名品、自慢の味 .....8
- ツアー&ウォッチングリポート 中津川流域を歩く／都留市内の桂川を歩く .....10
- 第2回コイを指標とした「環境ホルモン」調査の報告 .....10
- 市民・事業者・行政のページ 曾根原久司／花上友彦／北井清一／渡辺真 .....12
- 流域紀行「相模川の鮎」 .....15

## 《テーマ随想》

# 私の環境へのこだわり

本号から、これまでの「キーワード随想」が「テーマ随想」に変わりました。その第1回目は4名の会員に加えて、小・中学生おひとりずつに、環境への思いを寄せていただきました。

※掲載は順不同です。

## 環境保全への思いと実践

渡辺 一法

ようやく知名度が上がってきたPRTR法などの化学物質対策を5年間担当した。(下記参照)化学物質対策をひとことでいうなら、大気汚染防止法等のような従来型の排出規制ではなく、各工場による自主的な排出抑制等の自主管理の促進である。自主管理では、正直者が馬鹿を見ることがないように、公平性を担保しながら促進する仕組みが必要である。

PRTR法では、各事業所からの化学物質の排出を規制するのではなく、自主管理の促進のため排出量の公表を定めている。本格施行される平成14年度中には、開示請求すれば誰でも個々の工場ごとに大気中や水域へ化学物質を年間何トン排出したかが一目瞭然となる。つまり、自主管理の成果が全て数値情報で公表される仕

組みとなっている。

主要業界では、法施行を見据え、競うように排出量削減を進めた。担当者いわく、自社の排出量が公表されることを想定し、誰に見られても大丈夫なようにしているとのことである。あたかも自主管理に競争原理が働いたかのようであり、情報公開の威力を実感した。

いうまでもなく、情報は全体実像の一面を切り取ったものであり、一人歩きもするし解釈が異なる場合もある。PRTR法の情報公開に際し業界が最も懸念したことは、初めて情報を受け取った住民やNGOが正しく理解できるか、また関係者間の信頼関係はどうなのかという点であった。

しかし、先進的なNGOでは努力している企業を適切に評価・応援し、業界とNGO等との良好な関係づくりを進めたいといっている。そのためにも、積極的に情報公開・情報共有を進め、関係者間の信頼関係の醸成が大切であろう。

環境の情報は、県民・事業者・行政の共有財

PRTR法：「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」。一定規模以上の事業者に対し、有害化学物質（354種）の環境への排出量等に関する届出の義務付けと、国による排出量等の集計・公表を制度化したもので、環境の保全上の支障を未然に防止することを目的としている。



産である。PRTR法の経過を見ても、情報が誰でも速やかに入手でき、有効に使える環境づくりが今後の効果の高い環境対策のひとつであると思う。そのような県政や地域社会づくりに「こだわり」を持っていきたい。

(県央地区行政センター環境部)

## 縄文人の環境問題

松川 義彦

2001年1月27日～3月25日に相模原市立博物館で、「縄文人の環境問題―廃業・開発・リサイクル」という題名で冬季企画展が開催されました。縄文時代の人々と現代の人々が、それぞれ環境に対してどのように働きかけているかを比較する、というのがテーマでした。

「縄文時代の人々は環境と同化していた」「縄文の社会が環境共生型社会のモデルである」と言われますが、本当に縄文時代の人々は環境破壊と全く無縁の生活を送っていたのでしょうか。実際には、縄文時代といえども、人間が生活するためには、様々な形で環境に手を加える必要があったようです。当時、環境をうまく利用していたのは事実にしても、縄文人も落葉広葉樹林を開発して、本来の自然を変え、新しい

自然を創り出しています。

考古学の企画展でありながら、今までのように遺物を並べるだけでなく、現在私たちが抱える課題である環境問題を、一緒に取り上げたという新しい視点が、たいへん印象に残っています。

このように様々な視点から環境問題を取り上げることで、より多くの人々に理解して貰える機会が増えるのは、好ましいことであり、今後もいろいろな分野で環境問題が取り上げられることを期待しています。

「川ガキがいなくなった」という話を最近よく耳にしますが、川で遊ぶ子どもたちの歓声が聞こえなくなった理由は、水死する危険よりも、水質が安全でないという理由が、多いようです。また、若者の心から、真剣さが失われていると指摘する声も大きいようです。

遊びの喪失が真剣さの喪失に結びつくという脈絡を忘れて、真剣さを取り戻そうとすると、若者にもっと厳しくせよという一面的な意見になってしまいます。子どもが子どもとして、思い切り真剣に遊ぶという経験こそ大切なものですが、そういう遊び方を不可能にする環境を大人が作り出しています。子どもたちが思い切り遊べる環境を守っていくことこそ、私たちに課せられた使命だと考えます。

2001年5月から、「鳩川・縄文の谷戸の会」の田んぼでの米作りに参加しております。私自

身、子どもの頃から、農作業はほとんど経験がなく、耕運機や草刈機も初めてでしたし、田植えも初めてでした。餅つきやテレビの取材など、いろいろな経験ができ、汗をかいた後に自然に囲まれた中での食事は格別心地よいものでした。また、自然と触れ合える機会の少ない子どもたちも一緒に参加しており、だんだん慣れてきましたので、徐々に川ガキ(田んぼガキ)に育てていきたいと思っています。

この田んぼで作業をしていると、縄文時代の人々の思いに、ほんの少し近づけるような気が致します。昔から今まで日本人に受け継がれている「神道」には、大いなる自然に対して感謝と恐れの気持ちを表す心があるともいわれます。私たちの子孫や、すべての生き物が、この川の恵みを公平に受けられるよう、失われつつある環境を守り、失われた環境を回復するために行動していきたいと考えます。

(市民 相模原市)

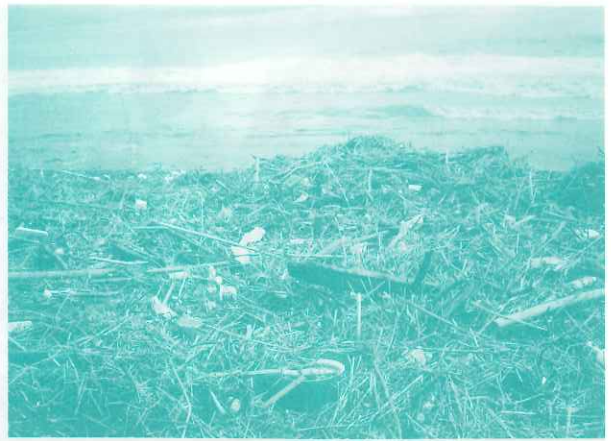
## 積み重ねの成果を実感

小川 昌三

湘南といえば誰もがご存じだとおもいますが、私はその湘南地域を中心に神奈川県下(横須賀市～湯河原町)の自然海岸を清掃している環境団体に勤めています。

この海岸の中には、河川が流れ込んでいるところがいくつかあります。相模川の河口付近の海岸もその中の1つですが、このあたりは大雨が降ると、大量のごみが流れ着きます。

昨年9月11日に台風15号が上陸した時には、平塚市にある金目川河口付近の花水海岸に、大量のごみが流れ着きました。ビニールやビン・カン、木くずなどのごみで砂浜が埋め尽くされてしまいました。私はこの光景を



見たとき、がくぜんとして言葉を失ってしまいました。清掃業者に清掃委託をしてもなかなか見通しがつきません。

そこで私たちはボランティアの方々に呼びかけて、少しずつでもきれいにしようとカン・ビン・ペットボトル等の回収を始めました。地元住民やサーファー、神奈川県職員など多くの人たちの協力のおかげで、たくさんあったごみが少しずつ減っていき、12月21日には元のきれいな海岸になりました。私は一人一人の努力が積み重なる成果がどんなにすばらしいことが実感しました。

それにしてもなぜ、こんなにも大量のごみが漂着したかということ、大半は河川からの流入ごみです。街中のごみが川に集まり、海にたどり着いてしまうのです。一部の人の何気ないポイ捨てなどが、知らないうちに海にまで影響を及ぼしています。

ですから、私はごみのポイ捨ては絶対にしません。当たり前のことですが、私はこの当たり前のことがとても大切なことだと思います。私たちや次の世代の子どもたちが生きていくために、本当に大切なことを今一度考えてみて、自分達にできることを少しずつ積み重ねて、いつまでもきれいな自然と共に生きていけるよう努力したいと思います。

((財)かながわ海岸美化財団)

## 明見湖の再生

堀内光代



私の住んでいる富士吉田市は、桂川の上流に位置しています。周辺には、源流の山中湖を始めとした富士五湖、それに小さいながら、私たちカーカネットの会が活動している明見湖<sup>あすみこ</sup>というはず池があります。

この明見湖にカーカネットの会員、地域の皆様、行政の人たちの協力により、あずま屋を造りました。また、小川をみなさんの手作りで作り、井戸を掘って水を流すことが出来ました。明見湖の水も少しずつですが、きれいになっています。

水の浄化が手伝ったためか、去年は、ここ何年にもないほど、はすの花が美しく、たくさん咲き、それは見事な風景でした。あずま屋から眺めるはず池は、はすの花が咲き、里山があり、向こう側には町の家や学校が見えてとても美しい、静かな風景です。このような昔から自然に

恵まれた素敵な明見湖をぜひ私たちの活動により守って次世代に残し、伝えていこう、一生懸命環境活動をしていこうと思います。

何と言っても、富士吉田市は日本一の富士山のふもとです。わたしたちは、大自然の緑豊かな環境に住んでいます。水は富士山に降った雨や雪が浸透してわき出した地下水(湧水)です。この水はおいしく安心して飲めます。

この清流を下流の人たちにも送ってやりたいです。それには桂川・相模川流域をきれいにしなくてはだめです。市民一人ひとりが環境のこと、他人のことを思いやり、助け合って幸せな生活ができますよう環境づくりをしなくてはなりません。

そして、大人も子どもも安心して住める環境にしていきたいと思っています。

(富士吉田市 市民)

### 【特別記事／小中学生が見た川の環境】

#### 今、日本の川は・・・

吉川哲郎

(平塚市松原小学校5年)

環境が良いというのは、どういうことなのだろうか。

たとえば、川。東京では、トノサマガエルが観察されたことがない。これは、洪水のためのコンクリート護岸がいけないのか、それとも地球の温暖化がいけないのか、家庭の汚水がいけないのか……。僕の考えだと、これらが微妙に組み合わさり、川にとても莫大に影響を与える。

まず、川のコンクリート護岸で草が生えなくなり、

虫もすめなくなる。そこへ、こわれかけたオゾン層を通して入ってくる日光がコンクリートを高温にし、水をあたためる。そのため、水中の生物までが生きていけなくなってしまう。いくら人のためだといっても、子どものためのきれいな川などどこにあるのだろう。

「プールがある」といっても、消毒されてしまったプールに生き物がすんでいるだろうか。はじめからプールがいいというのだったら、水さえあればよいというのだろうか。

今、日本の川は、きたなくて流れが速い。いくら遊水池でも水はきたない。「最後の清流」などといわれる四万十川があるが、それはあくまでも、他の川と比べてきれいなだけだ。ダムがあるということも

聞いたことがある。それでも清流といえるだろうか。

よく海に「ごみを捨てるな」などと書かれた看板がある。川にはそのようなものはあるだろうか。僕は見たことがない。生まれてから5本くらいの川を見たが、そのようなものはなかった。

なぜ、人々は焼け石（コンクリート）をつくってしまったのだろう。なぜ火（高温になったコンクリート）に油（家庭の汚水）を注いだのだろう。どうして消したい火に油を注ぐのだろうか。川を無から有にもどそうと努力しているのだろうか。不可能だといって、もどさないのはいけないということを知ってほしい。もう一つ、不可能を可能にする努力が川を救い、生きがいになることも知ってほしい。

## 共生

河西真央

（洗足学園大学付属中学校3年）

最近の日本の川には、高度経済成長期の乱開発の爪あとが残されているところが多い。特に、関東地方の平野など、河川の下流にあたるようなところへ行くと、川が人工的に作った溝のようにコンクリートで直線的に護岸されて、見るも無残な感じがする。そういう風景に出くわすと、人間が自然に対して犯した罪は重いと改めて思う。

## シンポジウム・上下流交流事業報告

### 上流から見た相模湖 下流から考える相模湖

桑垣 美和子

11月18日（日）は穏やかな天候に恵まれ、「相模湖知ろう・遊ぼう・体験しよう」をテーマにシンポジウムと交流会を相模湖で開催しました。

相模湖交流センターで行われた午前のシンポジウムでは、相模湖の歴史とダムに沈んだ村、浚渫土砂の埋め立て問題、森林の荒廃と森づくり、アオコの発生対策、アユが上らなくなった桂川など相模湖の抱える問題が多方面から語られました。会場からは茅ヶ崎の海岸の砂や河口干潟がなくなっているなど報告がありました。

コーディネーターの田中充さんから水源地域の立場に立ち、川を分断してきた社会から森をよみがえらせ、森、川、海が一体となる循環型社会を実現するため住民の意思を掘り起こし合意することが協議会の役割と提案がありました。

午後には、カヌーの試乗体験、遊覧船での湖上視察、ダムのゴミや自然ウォッチングと、それぞれが相模湖を体感し交流しました。今回の展示には、市民団体だけでなく事業者の方々に積極的に参加いただきました。藤野町の皆さんによる手作り作品のマーケット、鳩川縄文の谷戸の会のお餅つきは大変な人気で、お餅、甘酒、豆腐の試食に一般の方の長い行列ができました。

山梨県から参加された方から水源としての桂川流域や相模湖を考え、とても良かったと感想が寄せられました。

神奈川県内からのバス送迎を中止したため、参加者は約140名と少なかったことが残念でしたが、この事業の打ち合わせには、相模湖町を始めとする津久井町、藤野町、城山町、山梨県の上野原町が出席し、当日も器材の提供や準備、後かたづけに協力いただき実施することができました。

相模湖町の溝口町長から歓迎の挨拶をいただき、相模湖青少年音楽隊の楽しいトークを交えた演奏もありました。寒い中協力いただいた相模湖カヌークラブの皆さん、地元観光協会などお世話になりました。協議会を応援していただきありがとうございました。遠く富士吉田市から足を運んで下さった皆さん、ありがとうございました。

（代表幹事）



しかし、現代の私たちの生活は、河川の開発なくしては成り立たないことも事実だ。とくに水力発電などを目的としたダムの開発は、発電のほかにも、貯水、洪水防止など他の重要な役目も担っていて、私たちの生活には欠かせないものだと言えると思う。

ただ、一方的な利益だけを考えた開発が続けば、自然環境の破壊はもちろん、私たち人間にとっても悪影響を及ぼすということは避けられなくなる。

単に自然を“破壊”してそこに新しく何かを作るのではなく、自然と“共生”し、そこに新しい環境を作るということである。

実際、私の家の近くにある駒橋発電所の貯水タンクがある山（通称タンク山）には、親の年代が生まれる前からタンクがあり、私が小さいころには何かの遺跡のように思っていたほど風景に溶け込み、春夏秋冬の花々が咲き乱れ、私たちの目を楽しませてくれたものだ。そのように地域や自然に密着した開発を進めるためには、まず私たちに植え付けられた、高度経済成長期のときの、「自然は無料だ」という考えを捨てなければいけない。

そして、河川の開発に対して、意識面での改革が浸透することが河川の保護に繋がるのではないかと思う。

## いざな 協働への誘い「知ろう・遊ぼう・体験しよう」を終えて

石田 幸彦

先日、市民部会に声をかけられ、「NPOとパートナーシップ」について話をさせていただく機会を得た。その折に、ミッション（社会的使命）とパッション（情熱及び受難）が大切であること、これからはそれらを合わせてファッション（方法）にまで、高めていくことの必要性などを強調して、話を終えた。

1970年前後の動きが、「依らしむべし、知らしむべからず」という行政に対して「おねだり、然らずんば対決」という対立型のものであった（1972年に環境庁発足）。1980年前後は対案提言（アドボカシー）型の市民運動の時代で、1990年前後はパートナーシップによる問題解決が訴えられ始めた。自立していないもの同士が互いに手を取り合うことによって、補い合おうとする「自覚」に根ざした方法である。そして、2000年になって、これをさらに充実させて協働（コラボレーション）していくことが現在求められていることを話した。

しかし、今回相模湖で開催した「シンポジウム&交流会」では、協働の難しさもまた学ぶ機会となった。パートナーシップや協働になれていないということもあったとは思いますが、「みんなで補い合う」ことが「責任を明確にしない」ことに繋がってしまった。地元の相模湖町や近隣の城山町、津久井町、県境を越えてスタッフを出していた上野原町の協力に見られるように、従来では考えられない行政の取組

みがなされたことなど、多くの評価できるものがあったにもかかわらず、中途半端な印象を与えたのは止むを得なかったのか？ 下流域からのバスによる送迎をしなかったために、参加人数が少なかったことも原因しているのであろうか。

パートナーシップや協働にとって最も大切な、主体としての「自覚」を促すためにはファシリテーター（水先案内人）やコーディネーター（調整役）などの役割分担が必要不可欠であった。行政職員や企業や市民も、それぞれが「補い合う」より前に、すくんでしまった結果、それぞれの持ち味を発揮できなかったのではないだろうか。

ポスターを描いてくれた清水初代さんや相模湖カヌークラブ、勝瀬観光の小野会長など、これまで直接関わっていただけの機会の少なかった方たちにも、今回はご協力いただけた。こうした新たな試みを活かし、今後も開催されるであろうシンポジウムや上下流の交流事業などの展開に反映していくためには、役割分担は是非とも必要である。流域協議会を一つの運動体として捉えたとき、単にイベントを開催するだけではなく、獲得目標を設定することなども今後は考えられてよいだろう。

町内、全戸にピラ配りひとつしようとしなかった、主体的な自覚のなさを反省しつつ。

（監事 進行担当）

## 流域ウォッチング⑥

# 流域食べ歩き

## 名物、名産、自慢の味



### ⑤ 水かけ菜

都留市周辺で栽培が盛ん。アブラナ科のカブ属の水菜で、冬季でも凍らない富士山の湧水をかけ流して栽培される。茎や葉はアクが少ないので、そのまま調理して食される。水かけ菜を食材にした雑煮は郡内地方の正月料理の定番。

### ④ 鬱金 (うこん)

大月市周辺はうこんの原産地である熱帯とは程遠い気候であるが、寒暖の差や富士山から吹きつける冷たい風などが、素晴らしい揺り籠となり、ウコン (鬱金) の名前の如くオレンジ色に近い良いものができる。ワインや飴などうこんを使った様々な商品が創られている。



### ③ うどん

富士吉田市を中心として「吉田のうどん (郡内うどん)」として親しまれている。意外に知られていないうどんの宝庫として東京や神奈川からもファンが訪れる。腰のあるうどんの味を引き立てるため、各店独自の薬味 (すりだね) を加えたり、他ではあまり見かけない具としてキャベツがのる。



### ① 蕎麦 (そば)

気の遠くなるような長い年月を経て湧き出る富士山の雪解け水。この富士の名水で打った忍野の蕎麦は、県外からわざわざ食べにくるほどの美味しさ。村内のそば畑では8月下旬から9月上旬にかけて白い花が満開となり、カメラマンでにぎわう。



### ② クレソン

道志村の特産品。澄んだ空気と清らかな水が生み出した美味しい香味野菜の一種。生のクレソンの他、クレソンを使った加工品も作られている。







### ⑥ 酒まんじゅう (さかまんじゅう)

神奈川県県央地域から山梨県東部地域にかけての名物。祭りや祝い事など人々が集まる時などに家庭でも作られる。小麦粉に発酵した麴から作った酒を混ぜ、しばらくねかせると独特の風味が醸される。

### ⑦ さがみ長寿いも (ヤマトイモ)

相模原市は、県内一の「ヤマトイモ」の産地で、年間約320tが生産されている。主にお歳暮などの贈答用に利用される。「粘りがあり、栄養に富み美容と健康にもよく、長生きができるように」との意味を込め「さがみ長寿いも」と名付けられた。

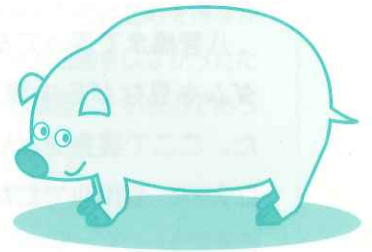


### ⑧ 鮎料理

神奈川県県央地域では、相模川は鮎川と呼ばれるほど鮎が有名。鮎漁の時期ともなると河原から七輪で鮎を焼く香ばしい匂いがただよう。また、屋形船や料亭では刺身・酢の物・塩焼き・天ぷら・甘露煮そして、串焼きの鮎でんなど、さまざまな装いで食卓に登場する。

### ⑨ 高座豚

神奈川県県央一帯の特産。生育の難しさから高度成長期には、飼育頭数が激減し「幻の豚」といわれたが、県内の養豚家による20年に及ぶ研究の努力の結果、現在の高座豚ブランドが完成した。生ハムやソーセージ、トンカツ、メンチカツなど一度食べたら、その味のとりこになる。



### ⑩ 網元料理

湘南地域の名物といえば、しらすなどの近海漁業。地元以外では滅多に食べられない生しらすなど、とれたての相模湾の海の幸を堪能できる。



紹介文は各市町村、及び物産関係団体のホームページを参考としました。



### ⑪ たたみいわし

相模湾でとれた新鮮なしらすを、い草の上に干して作る。約100年の歴史がある伝統的な製法で作るたたみいわしは良質で有名。軽く火であぶったり、トースターでこんがり焼いて、醤油や卵黄をつけて食べると、磯の香りが味わえる。

## 流域ツアー& ウォッチングリポート

### 9月22日 第10回流域ツアー&ウォッチング 八菅から半原まで・中津川流域を歩く

川嶋 庸子

10時に愛川町八菅橋右岸に集合。大木悦子さん（あいかわ自然ネットワーク）の案内で、まず尾山耕地まで歩く。ここには町道の建設計画があるが、昨年6月、絶滅危惧種のイトアメンボが見つかった。

山際の休耕田の一画、水のたまっている所をじーっと見ていると小さなイトアメンボが飛び交っていた。こんなにあっさりと絶滅危惧種に出会えるなんて。私たちが気づかないだけで、多くの生き物が知らない間に絶えていくんだろうな、と思った。

八菅橋まで戻って左岸側に渡り、遠くに宮ヶ瀬ダムを見ながら中津川左岸堤防へとたどりついた。ここで昼食をとり、さらに上流へ。田代集落に入り、愛川町でただ一軒残ったという大矢酒造

に立ち寄り、8代目の若主人に説明を請う。

田代運動公園を横切り、馬渡橋を渡り、川向この樹林のすき間にチラチラと旧水力発電所を確認する。堰もダムも作らず発電し、田代集落の電気をまかなっていたというのだから、なんとエコロジカルな発電所だろう。



かつて絹の生産地として栄えていた半原に着き繊維会館を見学。半原には横須賀市水道浄水場もある。ここから横須賀まで水道が敷設されており、途中そのためのレンガ作りのトンネルも歩いて通過した。商船や軍艦のために横浜や横須賀まで遠く相模川の道志や中津から水を引いたなんて。先人の先見の明の偉大さに畏敬の念を持ちながら、100年を過ぎた今、相模川のこのような変貌を彼らは予見していただろうか、と感慨深く帰路についた。

（厚木市 市民）

## 第2回コイを指標とした 「環境ホルモン」調査の報告

桑垣 美和子

昨年10月14日（日）、山梨県上野原町にあるゆずりはら青少年自然の里で、市民参加によるコイを指標とした「環境ホルモン」調査の第2回を実施しました。今回は相模湖上流端で魚類調査（13日）のため採捕したコイを検体にいただきました。

最初に講師の山梨県環境科学研究所の瀬古義幸さんから環境ホルモン（内分泌攪乱合成化学物質）について講義があり、環境省が工業用洗剤ノニルフェノールについてメダカを使い環境ホルモン作用があることを

世界で初めて確認したという最新情報も紹介されました。引き続きコイのメス化調査の方法について説明を受け、その後屋外に出て、作業に移りました。

まずコイの体長、重さを測り、血液を採取。コイの年齢を調べるため鱗を数枚サンプリングしました。一連の調査と測定は18名の参加者が分担し流れ作業で行いました。当日参加した高校生は血液採取を担当しました。最初はこわごわとでしたが、皆だんだんに慣れ、市民の方数名も解剖や血液採取を行いました。

お腹が膨れた雌のコイ1尾では、腹中から水が出て、腫瘍らしいものが見つかりました。作業は約2時間で終了し、採取した血液は環境科学研究所にて血液中のピテロジェニン濃度を測定し、3月には結果が得られるそうです。

## 12月8日 第11回流域ツアー&ウォッチング 田原の滝～宝鏡寺まで都留市内 の桂川を歩く

水谷 衣里

天気には恵まれたものの、底冷えのする寒さの中今回のツアーウォッチングは開催されました。集合場所である田原の滝に集まった参加者の皆さんは、さっそく田原の滝の観察に余念がない様子でした。

今回の案内者は、桂川をきれいにする会の清水絹代さんでした。清水さんは長年都留市にお住まいで、非常に頼れる案内人でした。わたしたち都留文科大学学生2名を含む参加者は、柱状節理の補強のため、工事が続く桂川から、特産品である水かけ菜が青々と茂る十日市場地区へと進みました。

十日市場地区は、家の間を縫うように水路が走っていました。そこにはこの地区に何軒もある養魚場から逃げてきた稚魚の泳ぐ姿も見られました。裏手が湧水源であるというお寺や、その湧水を利用して作られた養魚場を見せていただき、今まで知らなかった、この地区の豊かな“宝物”に驚かされました。

続いて蒼流峡<sup>そうりゅうきょう</sup>に沿って、上流に向かい散策しま



した。蒼流峡とは川がくねくねと曲がりくねっている様がまるで竜のようだというので名づけられたと聞きました。なるほど、上から見てみると曲がりくねった深い谷の合間を、水が勢いよく流れていく様がよくわかりました。しかし工事のせいか、水は茶褐色に濁っていて非常に残念でした。

そのまま上流に向かい、都留市内を流れる桂川の流域のうち、もっとも汚いといわれる場所に到着しました。そこは空き缶、ビニール袋などが散乱していて、見るも無残な状況でした。その地点は水の流れが緩くなっていて、今まで見てきた川とは違った表情をしていました。

昼には宝鏡寺というお寺にお邪魔して、精進料理を堪能しました。素敵な案内人と新しい出会いに恵まれ、桂川の新しい一面を見た一日でした。

(都留文科大学社会学科3年)

注：柱状節理

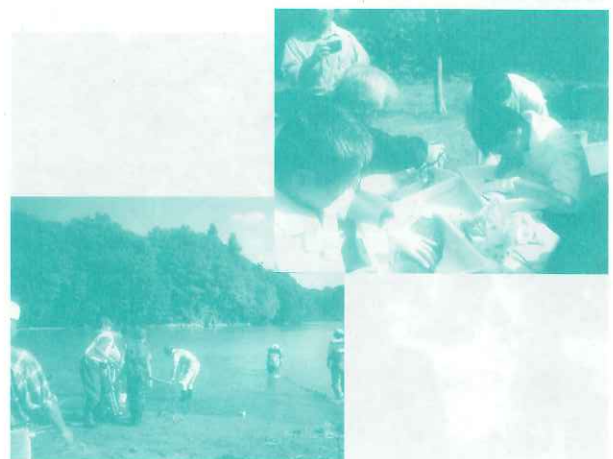
岩石中に発達した、五角形ないし六角形の柱状の割れ目。玄武岩や安山岩に形成される。

ピテロジェニンとはタンパク質の一種で、メスのコイの血液中にのみ含まれています。そこでオスのコイのピテロジェニン濃度を測ることでコイの雌化状況がわかります。

3年前に専門研究機関と連携して行った第1回の結果では、寒川取水堰の上流5地点では雌化率は約5%でした。一方、それより下流の湘南銀河大橋で横浜国立大学浦野・亀屋研究室が実施した独自調査の考察によると、5匹のオスのうち2匹のピテロジェニンの値が高く1000 $\mu$ g/mlを超えており、下水処理水の影響が著しいとのことでした。

13日に参加した魚類調査では、相模湖上端にある堆砂の上に立つと洗剤と下水が混じり合ったような臭気がしたのが忘れられません。

この調査は桂川をきれいにする会の篠田授樹さん(当協議会会員)が企画し、桂川・相模川流域ネットワーク、桂川・相模川流域協議会の3団体が共催し、山梨県環境科学研究所が事業として実施しました。



## 究極の環境活動はお百姓さん？

曾根原 久司

究極の環境活動はお百姓さん！？ 私は、真剣にこう思っています。

だって、お百姓さんをやっていれば、天気には敏感になるし。でもならざるを得ないですよ。農作物は、植物ですから、天気の影響をまろに受けますからね。そして、天気に敏感になるということは、当然、自然環境にも敏感になってきますよね。お百姓さんにとって、天気は死活問題ですから、真剣になりますよ、環境保全に対する意識も。ちなみに私も百姓をやっていますが、最近の天気には、ほとんど泣かされます。普通だったら、雨が降る時期に全然降らなかったり、そろそろ春になって暖かくなって、もういいかなあと種まきをしたとたんに、大寒波がきたりして、作物が枯れちゃったりと。この異変は、お百姓さんやれば誰でもすぐわかりますよ。

またこれがお百姓さんのすごいところなのですが、これをやっていれば、循環型のむだのない生活に自然になっていくのです。自分で育てた作物で、食料自給できるのは当然ですが、それを使って衣食住の食だけでなく、衣や住の分野まで資源を循環させることができるのですから。わらは、自然の断熱材になるし、また、わらじだって、縄だって編めるし。でも今編む人はいないか！

また、家畜でもちょっと飼ってれば、生ゴミは全然でないし。だって家畜が全部食べてくれるのだから。



ですから私たちは、お百姓さんライフスタイルを普及するために、いろんなイベントをやっています。お田植え祭り、そばの栽培から収穫、大豆の栽培から味噌仕込み会の開催、こういった昔のお百姓さんのライフスタイルのよいところを、現代風に少し形を変えて、おもしろイベントにして、みなさんに体験してもらっています。

みんなで、お百姓さんやって、環境問題を大いに語りましょう!!!

(NPO法人 えがおつなげて 代表)

## 荻野自然観察会の活動

花上 友彦

私たちの住む厚木市北部に位置する荻野は、市内でも里山的な原風景を今でも色濃く残している地域です。そこで私たちの住む地元の自然に親しみ関心をもってみつめることが、自然保護の入り口であるとの考えから、平成5年の春、本会を設立発足させたのです。

当初は十数名の会員でしたが、8年経った今では40名となり、会報も昨年11月で30号を数えました。これを記念して創刊号から30号までを合冊にして「荻野の自然」として昨年末発行しました。100部刊行しましたが、希望者が多く、たいへん好評を博しました。

本会の事業を箇条書きにすると

1. 年6回程度の自然観察会の開催（フィールドは荻野川中流や周辺の谷戸）
2. 会報「荻野の自然」を年6回程度発行
3. 桂川・相模川流域協議会と同調して、一級河川荻野川のクリーン作戦の実施
4. 荻野公民館主催事業に協力、外部団体からの観察会の依頼に協力
5. 会員の資質向上のため研修会実施

以上の事業、なかでも自然環境の保全に努めたことが、市のふるさとづくり推進協議会から認められ、昨年5月同協議会長（厚木市長）から感謝状が贈られました。

市では昨年度から市民の共通の財産である貴重



な動植物、伝承などを市民自らが探検し、市への愛着を深めるために「厚木らしさ探検隊活動事業」が企画され、本会も応募しました。「ヨシ群落保護法」を制定したドイツなど欧州諸国ではヨシ保護が活発なことや、水質浄化に重要な役割をもつヨシについて探検しようということにし、テーマを「荻野川周辺のオギ、ヨシの調査」にしました。その結果をまとめると、

1. 以前は至る所にヨシが群生していたのだが、たいへん少なくなっていること。
2. コンクリートの護岸では、オギ、ヨシともに皆無であった。
3. オギは堤防に近いノリ面に数カ所みられたのみ。

本会では荻野川中流の水生昆虫や水質の調査も実施しています。その結果はPH7.5~8.0、COD2ppmで季節による変化は殆どなく、水生昆虫もヘビトンボ、ヒゲナガカワトビケラなどが棲息していて、これらを総合すると「ややきれい」な川と結論づけてもよいと考えられます。ヨシやツルヨシは減少したものの、中洲のあるところには大体群生しているので、これらの保全についてどうしたらよいのか、本会でできることは何かについて、そしてヨシだちの有無と水質との関係について探っていきたいと考えています。

平成14年度は、本会と同じ環境保全に取り組んでいる近隣の諸団体とネットワークづくりをし、共に研究調査、実践をすすめる中で、行政や市民の協力をとりつきたいと考えています。

(荻野自然観察会 代表)



## 環境とエネルギーの未来

北井 清一

人類は火を使うことから始まったとも言われていますが、昨今オール電化の家族では、火を見たくもない子供も増えてきているようです。

たった40年前には、吉幾三が歌っていたように、「オラが村には電気がネエ！」を考えてみるとカマドで汁やご飯を炊き、ランプかろうソクが蛍の光という、まるで平安時代と変わらぬ生活も日本のあちこちにあった訳ですが、今やお湯のシャワーがトイレにまで着いていても普通の生活です。便利になったということはそれだけエネルギーを沢山使うようになったのとイコールです。

それでは30年後の日本人の生活は？

原油が枯渇すると言われたオイルショックから既に25年がたちますが、本当になくなるのでしょうか？実は近未来のエネルギー危機は、枯渇ではなく、今後10年程度で中国、インドの消費量が日本を追い越し、世界的供給不足になることです。

何と万里の長城以来の最大プロジェクトと言われる三峡ダムの予定発電量1800万KWが、中国の年間電力量の伸びと同じだということです。

12億人がオリンピックを見ようとTVを買えば、間違いなく今とは比べものにならないほど世界の環境問題は深刻化し、電源の割合もより一層原発に頼るほかないでしょう。

便利な暮らしと引き換えに、人類の未来はどうなっていくのか。恐怖であった火を初めて使いこなした原人のように放射能も今後克服できるの

か、もう少し世間の話題にのぼって欲しいものです。

そこで当社では、新エネルギーへの取組みとして、莫大な太陽エネルギーを活用すべく太陽光発電を推進しています。

日当りさえ良ければ家庭のエネルギー程度は結構賄える太陽光発電で創エネしていると、自然に感謝でき家計にも優しいので一石二鳥です。

省エネだけでは日本の未来は暗い上に環境、資源の観点からも待っている余裕はもうないのです。市民も事業者も行政もできることから始めていく必要があるのではないのでしょうか。

<http://www14.big.or.jp/eng/> (富士燃料株式会社)

## ひとと自然をつなぐ 活力ある林間都市

渡辺 真

相模湖町は、神奈川県北西部に位置し、西はすぐ山梨県で、北は東京都に接し、横浜・東京から60kmに位置しています。

相模湖町の町名の由来は、昭和22年に日本で最初の多目的ダムとして発電・水道水・工業用水・農業用水・下流の洪水調整の役目を果たすために創られた湖「相模湖」から命名されました。

町の地形は真ん中に湖があり、湖から東西に相模川が流れて町を二分しています。町の75%は山林で、集落と農地は相模川の両岸にあります。

相模湖町は人口11,000人弱の小さな町で、大都市神奈川県と東京都に挟まれ、厳しい町政運営を強いられているのが実状です。そういう中で、大都市の皆さんに誇れるものは自然の豊富なことでもあります。東京を中心に見渡すと山の見えるところが一番近いのが私たちの町です。

このようなことから、都会の皆さんと自然をつなぐ役割をするのが私たちに与えられた役目ではないかと「ひとと自然をつなぐ」という前文を掲げ、都会の皆さんが入ってきていただき活力を創っていただきたいことを念じて「活力ある林間都

市」という将来像を第3次と第4次の総合計画で定めています。

現在、相模湖町の山林の70%は水源保安林です。神奈川県民の水瓶として相模湖に蓄える水量の確保をするために湖に流れ込む山林は全部保安林としています。

相模湖に流れ込む主流のほとんどは、山梨県の桂川から入ってきますが、家庭雑排水などが入っているため富栄養化現象でアオコの発生がひどく、県企業庁ではエアレーションという湖底から空気を入れて上の湖水の温度を上昇させないようにしていますが、なかなか解決までにはいたっていないようです。

森林の公益的機能は水量確保以外に水質浄化作用もあり、森林の果たす役割は甚大なものがあります。

私たちのように、水源地で生活をしているものは、水の量の確保や質の向上のため、山林を守り下水道を整備し、良好な水を都市部の皆さんに送水するように努力をしています。

県では、このような水源地のために、新税で水源環境税の検討を進めていますが、水源地としては是非とも環境税を発足させ、水源地への還元を願っています。

(相模湖町 産業環境課)



## 相模川の鮎

鮎は、相模川を代表する魚で、昔から最も重要な漁獲物でした。鮎の川としての相模川の歴史は古く、9世紀までさかのぼることができます。

承和2年（835年）6月29日の太政官符（『類聚三代格』巻16）には、相模川が「鮎河」という名で記されています。この鮎河という表現は、相模川がアユの川で特色づけられているあらわれであり、当時からアユ漁が盛んであったようです。相模川右岸にある神奈川県愛甲郡の愛甲はもともと「鮎河（あゆかわ）」が訛った「あいかう」に由来すると考えられています。

今も相模川の支流である「小鮎川」にその名残りをとどめていることは、皆様もご承知のとおりです。

時代は下って鎌倉時代の正治2年（1200年）7月1日の条には、源頼朝が「鵜船」を見るために相模川に赴き、畠山次郎、葛西兵衛尉などが供奉（おとも）したとあります。「鵜船」の具体的な内容は定かではありませんが、鵜を使っての鮎漁のことだと推察できます。相模川では、戦前まで上流部で鵜飼いが続けられていましたので、すでに鎌倉時代に鵜飼いが行われていたとしても不思議ではありません。

延享4年（1747年）の相州津久井県荒川御番所勤方之義申上候書付によると、

一、鵜 壹羽 金壹分永百弍拾五文  
是は関野村から大島村迄道法三里余

一、鵜 壹羽 永百八拾七文五分  
是は大島村より田名村迄道法壹里余

と記されており、関野村から大島村（相模原市大島）の間で1羽、大島村から田名村（相模原市）の間で1羽の鵜を使い、その運上金として上記の金額を荒川番所に収めていたことを示しています。

江戸末期の蘭学者であり、すぐれた南画家でもあった渡辺華山（1793～1856）は、天保2年9月下旬、厚木を訪れ「相模川を渡る。此の川、大凡三、四丁もありぬらん。香魚甚だ多し。厚木に至る」という日記を残しています。

香魚とは、いうまでもなく鮎のことで、川底の

石や岩に付着している水苔<sup>みずこけ</sup>を食べて成長するので香りがよく、鮎の別名として呼ばれていました。

相模川の鮎漁が有名になったのは江戸時代からのようで、本川はもとより支流でも絶対に鮎を勝手に獲らせなかった。禁を破る者は金五両の罰金に課したと言います。漁の方法も釣りだと、釣り針の痕が残るので、わざわざ越前（福井県）から職人を雇ってきて梁（やな）を仕掛け、鮎を傷めないようにしました。

日中、川漁師によって獲られた鮎は、集荷所に集められ、夕方江戸に向けて搬送しました。途中八王子近くの日野で荷次ぎをして、夜通し担ぎ続け、未明には江戸四谷の門屋に着いたといえます。鮎の搬送には、江戸籠（細長い竹籠で、これを幾つも重ねて40尾ぐらいを両端にして天秤棒で担いだ）で、厚木の問屋『井上きゅうさん（上町）』と『斬屋高梨（下町）』の二軒が取り扱っていました。鮎を運ぶ道中に唄ったという鮎かつぎ唄の一節を紹介すると、

鮎は瀬にすむ／鳥は木にとまる／下の情けの下にすむ／オババどこに行く二升樽下げて／嫁の在所に孫抱きに／アア来た来た／留場に近いぞ／休みはそこだぞ……

こんな唄を歌いながら暗い夜道を、荷のギシギシと軋む音に合わせて駆け抜けたのでありましょ。また、大きな声で威勢よく歌うと鮎が腐らず、生き生きとしたまま問屋へ運べるといわれたそうですが、実際には“クサリ”として扱われる物が多かったようです。

鮎のはらわたは、水苔を採食しているところから濃い緑色で、これを塩漬けにし、酒の肴（うるか）として珍重しました。さらに、腹痛止めの整腸薬や口臭を防ぐのにも効き目があるとかで、優れた医薬品が出回るまでは、接客業の女性たちに愛用されたといえます。

（佐々木 次郎 平塚市環境政策課）

## ※ 参考文献

- ・ 厚木市史編集委員会編「厚木近代史話」
- ・ 高瀬慎吾著「厚木と遊相日記」

## 桂川東部地域協議会より

—2001年度活動を振り返って—

河西 悦子

発足して3年目を迎えた桂川北都留地域協議会は、6月の総会で、今までの上野原・大月に加えて都留の地域も含めて活動していこうと、名称も桂川東部地域協議会と改めました。地元鳥沢出身の落語家林家正雀師匠にご協力願い、記念講演を行いました。地元の方々にも多数参加いただき、人情話の熱演に聞きほれました。

2001年度の主な行事としては、8月、地元鳥沢小学校に協力していただいて、子供達の『川で遊ぼう』を行いました。魚釣り・魚のつかみ取りを中心に川の流れの中で嬉々として水と戯れる子供達の目の輝きに準備の苦労も吹っ飛びました。

12月、昨年に続き2度目となる『炭焼き体験ツアー』を、今回は、短時間で焼ける竹炭の講習を中心に実施しました。小学生から80代までの幅広い年代の参加があり、生協のお肉を使った焼肉、じっくり煮込んだカレー、甘酒を堪能しました。当日周辺の山での害獣駆除と重なり逃げ惑うイノシシを目の当たりにし、里山での共存の難しさも考えさせられました。

2月、やはり2度目の『きのこの植菌作業体験ツアー』を行いました。幹事の手馴れた指導で予定より早く作業を終え、原木のお土産つきで、神奈川からの参加者も喜んでくれました。

その他、地域でのクリーンキャンペーン（大月市笹子地区・都留市朝日川）に協力、地元の人々と密着した実践的活動を目指してきました。

これからはさらに、下流域と顔の見える交流も考えて行きたいと思っています。

(代表幹事)

### ホームページの更新頻度を高め、 画像で速報もいたします

HPの更新の頻度を平均月1回程に高めました。協議会本体と地域協議会が主催、共催、そして協力開催するイベント等の予定はチラシとほぼ同時にHPでも紹介できるようになりました。

また活動記録等も写真を多くして速報し、臨場感・現場感覚でご覧いただけるように努力いたします。

<http://www.katura-sagami.gr.jp/>

### あなたも入会しませんか!

★市民年会費：個人会員 一口1,000円(一口以上)  
なお、団体として加入される会員の方は、  
二口(2,000円)以上でお願いします。

★事業者年会費：一口10,000円(一口以上)

<振込先>

郵便振替：振込口座 00220-5-10259  
名 義 桂川・相模川流域協議会

銀行振込：振込口座 三井住友銀行横浜支店  
普通預金 6825559  
名 義 桂川・相模川流域協議会  
代表幹事 桑垣美和子

## 編 集 後 記

◆杉花粉の季節をぬけ、山は芽吹きの季節。アレルギー性鼻炎の原因は杉花粉をつけた大気汚染の原因となる粒子状物質。でも悪者はいつも杉花粉で人間ではないとされる。戦後杉を植えたのは戦争で木を切り、家が焼けてしまったから。健康を増進する森林浴は、フィトンチッドが多い針葉樹の森。広葉樹の森は多様な生き物のエサ場。森(山)はやはり多様性がよい。(K)  
◆前号の7号からは、目次の表現法とか、標題・見出し等を筆者の意図を尊重して工夫いたしました。いかがでしたでしょうか。一つ一つの文章は、個性あふれる内容です。特に協議会メンバーの記事は共に行動した仲間のメッセージでもあり、共感を呼ぶことが多いのではないのでしょうか。関連して、ホームページにも目次を入れて毎号の特徴を持たせることができるようになりました。(M)

◆日頃何気なく購入しているジュースやお茶。少し見方を変えて「中身と一緒に容器の素材であるアルミや石油(ペットボトル)も買っている」と考えてみませんか。昨年8月の台風直後の海岸清掃時に見た「カラフルな波打ち際」を見てそんなことを考えました。(O)  
◆相模川の底生先住民であるマシジミが健在でした。雌雄同体のタイワンシジミに本流を追われた彼らは、予想どおり、水のきれいな支流でひっそりと暮らしているようです。(A)

あじえんだ113

No.8 (2002.3.29発行)

発行 桂川・相模川流域協議会

編集 あじえんだ113編集委員会

事務局 山梨県森林環境部環境活動推進課 〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1 TEL(055)223-1503 FAX(055)223-1507

神奈川県環境農政部大気水質課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL(045)210-1111 内4128 FAX(045)210-8846

(この冊子は再生紙を使用しています)